

——あの人はいつだって美しい。

黒と赤。

まるでそれは炎。

あたかもそれは血。

この世界の何よりも美しいと思える存在は、苛烈なまでに燃え上がり、加賀の眼に焼き付く。

それが己の視界なのか。

それとも過去の幻影なのか。

今となっては判断がつかない。

むしろ、つけなくていいのだと自らに言い聞かせていたことすらあった。

理解はしている。

納得もしている。

この体は姉さまのもの。

この想いは「姉さま」とともに。

バグのような感情が胸の片隅に住まい、激昂したことはあれど、加賀自身としては変

わっていないつもりだった。

「姉さまの隣には私の居場所がある」

かつての言葉を噛み締める。

何度も、何度でも。

その行為の意味を問われれば、答える言葉を持ち合わせてはいないものの、誰に聞かれるでもない独り言なら構わないだろうと加賀は再び呟いた。

「姉さまの隣には、私、の居場所がある」

確認するように。

思い出すように。

言い聞かせるように。

確かに繋がっている緑の糸を辿るような危うい声音は空に舞い、やがては消えていく。

そこに込められた感情は加賀自身も知らぬまま、気付かぬまま、誰に向けられたのかだけ明確だというのに、中身は虚ろなまま風へと溶けていく。

「ああ……」

悲痛な面持ちで加賀は臉を伏せた。

長いまつ毛が整った顔を陰をさし、その痛みの深さが垣間見える。

あの人はもうかえってきたというのに。
消えない痛みの名前は何か。

「……姉さまに菓子を……」

痛みを忘れようと思えど、赤城の姿を思えば思うほどに痛みは増す。そんな理由など、どこにもないというのに。

天城がおり、赤城がおり、彼女が息災である。

満たされた彼女の隣に居場所がある。

ほうら。

何も問題などないというのに。

(本当に?)

脳内にちりつくノイズに加賀は顔を歪める。

「姉さまは現状に満足している。なら私ができることなどこれ以上は——」
紡ぎかけた言の葉は、はらりと落ちた。

違和感。

喉元まで出かけた偽りの本音。

黒と赤が美しい赤城の姿を想う。

喪われたあの人が甦り、喜ぶあの人を想う。

何も問題などないというのに。

はらはらと舞う桜を愛でる余裕もなく、加賀は自らの体を抱きしめた。あの人を受け継いだ自身があり、あの人がおり、何が欠けているというのか。

そもそも求められていない。

赤城がその言葉を欲すると言うのなら、いくらでもささやこう。心のままに、思うままに。

けれど求められていないならば、口にする必要はない。

それは不必要という意味ではなく、彼女が既に満たされているのなら、あえて溢れさせる必要もないという。

「――？」

再び、違和感。

加賀は過去の幻影を思い浮かべる。

あの日に喪われたもの。

あの日に受け継いだもの。

あの日から育んだもの。

この体は、何で、できている？

「私は……」

過去の幻影が重なる。

天城（姉さま）が、赤城（姉さま）と。

それは刹那の悲劇。

起こりうるはずのない未来の創造。

しかし、縁に浮かんでしまったものをかき消せるほど、加賀の生きてきた道は穏やかではなかった。

あるかもしれない未来。

起こってはならない悲劇。

しかし、現にあの人は一度はしんでしまった。

赤城のことを身を呈して守る気概ではあるが、一歩でも届かないことがあれば、目の

届かない場所で何か起きたらば、どうなるのか。

むしろなぜ今までこの可能性を視野に入れていなかったのか。

至らぬ自身に加賀は宙を仰いだ。

晴れ渡った空に似つかわしくない曇った顔。

本当はずっと前から見ないふりをしていたのかもしれない。

そうと気付いてしまえば、胸は突然に主張を始める。

「そうか……私は、「姉さま」に望まれたからではなく、姉さまを……そうか、そうか

……は、はは」

気付いてしまえば単純なことだったのかもしれない。

そして、その単純なことに気がついたのが今でよかった。

加賀は散り始めた桜を仰ぎ、ようやく笑みを浮かべた。


「礼を言うぞ、名も知らぬ桜たちよ。その散りざまがあの人に似ていたが故に、私は辿

り着くことができた」

ゆっくりと立ち上がり、加賀は歩き始める。

まずは菓子を作ろう。

そして茶を飲み、菓子を食べ、あの人の前で告げてみよう。



「姉さまはどんな顔をするだろうか」
考えかけ、すぐに考えるのをやめた。

「それは、姉さまの決めることだ」

足取りは軽く、加賀の青中はどこか浮かれているようにも思えた。